



## 6年生修学旅行 part2

6年生の修学旅行の二日目は、朝からお土産を買いました。財布の中身と商品を見比べて、ハウステンボスでのお土産も念頭に入れながら、貸し切り状態の店内で、次々にお土産を買っていきました。その後、無窮洞（むきゅうどう）という防空壕の見学に行きました。無窮洞は、第二次世界大戦中、当時の教師と小学生たちが掘った巨大な防空壕のことです。中は幅約5m、奥行き約20mで、子供たち500人が避難できたというほどの大きさだそうです。見学を終えた6年生の子供たちは「あの巨大な防空壕を子供たちが掘ったというのは信じられません。今の時代にそんなことがあれば、みんな逃げ出すかもしれません。」と感想を述べていました。その後、6年生が一番楽しみにしていたハウステンボスに行きました。ハウステンボスは幸いなことに、観光客が少なく、子供たちの動きもスムーズでした。子供たちは様々なアトラクションを体験したり、ランチを堪能したりと十分にハウステンボスを満喫していました。

解散式では修学旅行の感想で「原爆による熱戦の被害は、想像の上をいき、人や建物、木そしてたくさんの人の夢や思いまで壊してしまう力に驚きました。（中略）ハウステンボスで楽しい思いができ、今はとても恵まれていると感じました。」という声がありました。修学旅行の学びを今後の生活に活かしてほしいと思います。



## ●ひこうきぐも✈ vol.24

スペインのバルセロナでは、天才建築家アントニオ・ガウディの作品に触れる旅ができました。アントニオ・ガウディは、1852年に生まれ、1926年に亡くなりましたが、その間、故郷バルセロナにグエル公園、カサ・ミラ、グエル邸など多くの作品を残しました。彼の創り出した作品からは強烈な個性が感じられます。優しい曲線を多用し、ときにはモザイクやステンドグラスで彩りを添え、ときには奇抜な飾り付けをし、それらの作品からは強烈なインパクトを受けます。バルセロナを歩けば、そこかしこでガウディの作品に出会うことができ、その圧倒的な存在感に目を奪われます。

その中でも特に日本人に知られているのは、サクラダ・ファミリア聖堂ではないでしょうか。以前某コーヒーマーケティングのCMでもその威容は放映されています（スウィートコーンが4本天空にそびえているような建物です）。私も初めてその前に立ったときは、余りの存在感に圧倒され、ただ「はあー。」と溜め息をつくばかりでした。人間の頭でこのような建物が考え出されたとはとても思えません。やはりガウディは天才だー！と実感することができました。教会そのものの形はもちろんの事、教会の外壁の飾り付けに目を奪われました。まるで生き物のようにそこからは命の息吹や躍動感が感じられたのです。また、教会の表と裏は、全然外壁のデザインが違い、表は曲線を裏は直線を多用し、ガウディのこだわりが感じられました。

ただ私が見た教会は、まだ完全な形ではありません。1882年に建設が始められ、ガウディの計画通りに完成させるには、あと200年かかると言われているのです（その後、ITの活用、潤沢な資金の確保等の要因によって、ガウディの没後100年にあたる記念の2026年に完成予定と発表されました）。このように気の遠くなるような設計をする事自体、彼を「天才」といわずに呼ぶ所因なのでしょう。

私は天才からエネルギーをもらってバルセロナをあとにし、もう一人の天才に会うためにマドリッドへと向かいました。



※「ひこうきぐも」は、あくまでも荒木が旅をした当時、約30年前の街の様子です。現在とは状況に違いがあることをご了承ください。バックナンバーは昨年度からの累積です。